

甲 第 号

石岡 興平 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

## 論文審査の要旨及び担当者

	委員長	教授	川口 昌彦
論文審査担当者	委員	准教授	田中 利洋
	委員(指導教員)	教授	庄 雅之

主論文

Significance of bacterial culturing of prophylactic drainage fluid  
in the early postoperative period after liver resection for predicting  
the development of surgical site infections

手術部位感染の予測因子としての肝切除術後早期のドレーン排液培養の有用性

Kohei Ishioka, Daisuke Hokuto, Takeo Nomi, Satoshi Yasuda, Takahiro Yoshikawa,  
Yasuko Matsuo, Takahiro Akahori, Satoshi Nishiwada, Kenji Nakagawa, Minako  
Nagai, Kota Nakamura, Naoya Ikeda, Masayuki Sho.

Surgery Today. 2018 June;48(6):625-631.

## 論文審査の要旨

肝切除において、胆汁漏や手術部位感染は高率に発生するが、肝切除術後早期のドレーン排液培養結果と手術部位感染の発生の因果関係は明らかではない。本研究では、肝切除術後1日目のドレーン排液培養結果が手術部位感染の予測因子になりうるか検討した。対象は2014年1月から2016年12月までに肝切除術を行った195例。全例で術後1日目にドレーン排液を培養検査に提出し、ドレーン排液培養陽性結果と手術部位感染の発生の関連性について評価した。結果、ドレーン排液培養陽性結果における周術期のリスク因子を多変量解析で検討すると、消化管合併切除が独立したリスク因子であった(オッズ比:24.4,  $P=0.006$ )。また、手術部位感染における周術期のリスク因子を多変量解析で検討すると、術後1日目のドレーン排液ビリルビン値が $3\text{mg/dL}$ 以上(オッズ比:4.72,  $P=0.002$ )とドレーン排液培養陽性結果(オッズ比:26.1,  $P=0.006$ )が独立したリスク因子であった。胆管空腸吻合あるいは消化管合併切除を行っていない症例での検討では、ドレーン排液培養陽性と手術部位感染の因果関係は認めなかった。肝切除術後1日目のドレーン排液培養陽性は手術部位感染と相関関係を認めたが、消化管に関与した手技を行っていない症例では因果関係は認めなかったと結論づけている。

公聴会での発表は明快でわかりやすく、質疑では、高ビリルビン血症と排液ドレーンのビリルビン値の関連性、消化管合併症例における同時手術の方向性、合併症発生と関連する術前因子の関与、報告されている創部感染のリスクファクターと本研究の結果との関連性、肝切除術での創部感染の予防法、消化器外科手術におけるドレーン管理などについての質問がなされ、各質問に対する確に回答していた。

肝切除術の周術期管理における意義のある研究で博士課程の学位に値する研究であると評価する。

## 参 考 論 文

1. Anal gland adenocarcinoma in situ with pagetoid spread: a case report.  
Kohei Ishioka, Fumikazu Koyama, Hiroyuki Kuge, Takashi Inoue, Shinsaku Obara, Takayuki Nakamoto, Yoshiyuki Sasaki, Yasuyuki Nakamura, Maiko Takeda, Chiho Ohbayashi, Masamitsu Kuwahara and Masayuki Sho.  
Surg Case Rep. 2018 Dec;4:63
2. Does anatomic resection improve the postoperative outcomes of solitary hepatocellular carcinomas located on the liver surface?  
Hokuto D, Nomi T, Yasuda S, Yoshikawa T, Ishioka K, Yamada T, Takahiro A, Nakagawa K, Nagai M, Nakamura K, Kanehiro H, Sho M.  
Surgery. 2018 Feb;163(2):285-290.
3. Risk Factors for Unresectable Recurrence After Up-Front Surgery for Colorectal Liver Metastasis  
Hokuto D, Nomi T, Yasuda S, Yoshikawa T, Ishioka K, Yamada T, Akahori T, Nakagawa K, Nagai M, Nakamura K, Obara S, Kanehiro H, Sho M.  
World J Surg. 2018 Mar;42(3):884-891.
4. The safety of the early removal of prophylactic drainage after liver resection based solely on predetermined criteria: a propensity score analysis  
Hokuto D, Nomi T, Yasuda S, Kawaguchi C, Yoshikawa T, Ishioka K, Obara S, Yamada T, Kanehiro H.

HPB (Oxford). 2017 Apr;19(4):359-364.

5. 前腕創縫合時の迷走神経反射が誘因と考えられた非閉塞性腸間膜虚血症の1例

石岡 興平, 高 濟峯, 西和田 敏, 向川 智英, 石川 博文, 渡辺 明彦.

日本臨床外科学会雑誌. 2014;75(11):3083-3087

6. 右鼠径ヘルニア術後メッシュ感染に対する外腹斜筋授動一期的腹壁再建の1例

石岡 興平, 小山 文一, 中川 正, 中村 信治, 藤井久男, 中島祥介。

手術. 2013;67(11):1685-1688

7. 幽門側胃切除術後に発症した脾腫瘍に対し拡大視効果で残胃血流を温存しえた腹腔鏡下脾臓摘出術の1例

石岡 興平, 高 濟峯, 吉川 高宏, 向川 智英, 石川 博文, 渡辺 明彦。

日本内視鏡外科学会雑誌. 2013;18(3):345-350

8. ミグリトール内服中に発症した回腸腸管囊腫様気腫症の1例

石岡 興平, 内本 和晃, 大槻 憲一, 小山 文一, 中川 正, 中村 信治, 植田 剛, 錦織 直人, 藤井久男, 中島祥介。

日本消化器外科学会雑誌. 2011;44(8):1011-1017

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに消化器機能制御医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

令和2年9月8日

学位審査委員長

侵襲制御・生体管理医学

教授 川口昌彦

学位審査委員

画像診断・低侵襲治療学

准教授 田中 利洋

学位審査委員(指導教員)

消化器機能制御医学

教授 庄 雅之